

日蓮大聖人御書全集

おうしやじょうじ

王舎城事

新版
1545
ゝ
1548

おうしやじようじ

王舎城事

ぶんえい

ねん

文永12年（'75）

がつ

にち

4月12日

54歳

さい

しじようきんご
四条金吾

ぜにいつかんごひやくもん

た

そうら

お

銭一貫五百文、給び候い畢わんぬ。

しょうもう

くわ

うけたまわ

そうろう

よろこ

い

そうろう

焼亡のこと委しく承り候こと、悦び入って候。

たいか

にんのうきよう

しちなん

なか

だいさん

かなん

ほけきよう

大火のことは、仁王経の七難の中の第三の火難、法華経の

しちなん

なか

だいいち

かなん

七難の中には第一の火難なり。

そ

こくう

つるぎ

切

みず

ひや

夫れ、虚空をば剣にてきることなし。水をば火烧くこと

しょうにん

けんじん

ふくにん

ちしや

ひ焼

なし。聖人・賢人・福人・智者をば火やくことなし。例せ

がつし

おうしやじよう

もう

だいじよう

ざいけくおくまんけ

しちど

ば、月氏に王舎城と申す大城は、在家九億万家なり。七度

まで大火たいかおこりてやけほろびき。焼 万民ばんみんなげきて逃亡とうぼうせんと

せしに、大王だいおうなげかせ給うことかぎりなし。その時とき、賢人けんじんあ

りて云わく「七難しちなんの大火たいかと申すことは、聖人しょうにんのさり、王おうの

福ふくの尽くる時ときおこり候そうろうなり。しかるに、この大火たいか、万民ばんみんを

ばやくといえども、内裏だいりには火ちかづくことなし。知んぬ、し

王おうのとがとがにはあらず。万民ばんみんの失しなり。されば、万民ばんみんの家を

王舎おうしゃと号ごうせば、火神かじん、名なにおそれてやくべからず」と申せ

しかば、さるへんもとて、王舎城おうしやじょうとぞなづけられしかば、名

それより火災かさいとどまりぬ。されば、大果報だいかほうの人をば大火たいかはや

かざるなり。

こくおう

焼

し

にほんこく

かほう

付

これは国王すでにやけぬ。知んぬ、日本国の果報のつく

徴

くに

だいほうぼう

そうとう

ごうじよう

るしるしなり。しかるに、この国は、大謗法の僧等が強盛

祈

にちれん

ごうぶく

ゆえ

にいのりをなして日蓮を降伏せんとする故に、いよいよ

災

きた

うえ

な

もう

たい

あらわ

そうろう

わざわい来るにや。その上、名と申すことは体を顕し候

りようかぼう

もう

ほうぼう

しょうにん

かまくらじゅう

じようげ

し

に、両火房と申す謗法の聖人、鎌倉中の上下の師なり。

いっか

み

とど

ごくらくじや

じごくじ

一火は身に留まりて、極楽寺焼けて地獄寺となりぬ。また

いっか

かまくら

放

ごしよ焼

そうら

いっか

げんぜ

一火は鎌倉にはなちて、御所やけ候いぬ。また一火は現世

くに

うえ

にほんこく

してい

むけんじごく

お

の国をやきぬる上に、日本国の師弟ともに無間地獄に堕ち

て、阿鼻あびの炎ほのおにもえ候そうろうべき先表せんぴようなり。愚癡ぐちの法師ほつしとう等が

ちえちえものものもうもうもちもちそうらそうらていていそうろうそうろう

智慧ある者の申すことを用い候わぬは、これ体に候なり。

ふびんふびんさきざきおんふみさきざきおんふみそうらそうら

不便、不便。先々御文まいらせ候いしなり。

おんうま野飼おんうま野飼そうらそうら友引友引栗栗げげうまうま

御馬のがいて候えば、またともびきして、くり毛なる馬

儲儲そうらそうらみみそうらそうら

をこそもうけて候え。あわれ、あわれ、見せまいらせ候わ

ばや。

なごえなごえおおおおしさいしさいきき

名越のことは、これにこそ多くの子細どもをば聞こえて

そうらそうらひとひと行行遭遭りりぐぐほうもんじさんほうもんじさん

候え。ある人のゆきあいて、理具の法門自讃しけるを、

散散々々責責そうらそうらうけたまわうけたまわそうろうそうろう

さんざんにせめて候いけると承り候。

にようぼう

おん 祈

ほけきよう

うたが

また女房の御いのりのこと、法華経をば疑いまいらせ

そうら

ごしんじん

弱

たま

によほう

候わねども、御信心やよわくわたらせ給わんずらん。如法

しん

ひとびと

まこと

に信じたるようなる人々も、実にはさもなきこととも、こ

み

そうろう

し

そうろう

によにん

れにて見て候。それにも知ろしめされて候。まして女人

みこころ かぜ

繫

取

おん

かな

そうら

の御心、風をばつなぐともとりがたし。御いのりの叶い候わ

ゆみ

強

弦

弱

たち

劍

使

ざらんは、弓のつよくしてつるよわく、太刀・つるぎにてつか

ひと

おくびよう

そうろう

ほけきよう

おん

失

う人の臆病なるようにて候べし。あえて法華経の御とが

そうろう

ねんぶつ

じさい

われ

捨

ひと

にては候べからず。よくよく念仏と持斎とを我もすて、人

ちから

塞

たま

たと

さえもんどの

ひと

をも力のあらんほどはせかせ給え。譬えば左衛門殿の人に

憎

おんものがた そら

にくまるるがごとしと、こまごまと御物語り候え。いかに

ほけきよう ごしんよう

ほけきよう

敵

遊女

法華経を御信用ありとも、法華経のかたきを、とわりほど

思

にはよもおぼさじとなり。

いっさい

ふぼ

背

こくおう

従

ふこう

一切のことは、父母にそむき国王にしたがわざれば、不孝

もの

てん

責

被

ほけきよう

敵

の者にして天のせめをこうぶる。ただし、法華経のかたきに

ふぼ

こくしゅ

もち

こうよう

なりぬれば、父母・国主のことをも用いざるが、孝養とも

くに

おん

ほう

そうろう

なり、国の恩を報ずるにて候。

にちれん

きようもん

みそうら

ふぼて

摺

されば、日蓮はこの経文を見候いしかば、父母手をすり

制

し

そうら

ひと

勘

当

てせいせしかども、師にて候いし人かんだうせしかども、

かまくらの ごとかんき にど

被 くび

鎌倉殿の御勘気を二度までかぼり、すでに頸となりしかども、

恐 そつら いま にほんこく ひとびと どうり

ついにおそれずして候えば、今は日本国の人々も道理かと

もう 辺 にほんこく こくしゅ ふぼ ししよう もう

申すへんもあるやらん。日本国に国主・父母・師匠の申すこ

もち てん 助 被 ひと にちれん

とを用いずして、ついに天のたすけをかぼる人は、日蓮よ

ほか い そつら のち ごらん

り外は出だしがたくや候わんずらん。これより後も御覧あ

にちれん 謗 ほつしばら にほんこく いの くほろ

れ。日蓮をそしる法師原が日本国を祈らば、いよいよ国亡ぶ

けつく 責 おも とき かみいちにん しもばんみん

べし。結句、せめの重からん時、上一人より下万民まで、

髻 分 奴 齋 食 例

もとどりをわかつやつことなり、ほぞをくうためしあるべ

ごしよう こんじよう ほけきよう かたき ひと

し。後生はさておきぬ、今生に法華經の敵となりし人を

ぼんてん

たいしやく

にちがつ

してんぼつ

たま

みなひと

見懲

ば梵天・帝釈・日月・四天罰し給いて、皆人にみこりさせ

たま

もう

そうろう

にちれん

ほけきよう

ぎようじや

給えと申しつけて候。日蓮、法華經の行者にてあるなし

ごらん

は、これにて御覽あるべし。

もう

こくしゆとう

ほつし

脅

おも

こう申せば、国主等はこの法師のおどすと思えるか。あ

憎

もう

だいじだいひ

ちから

むけんじごく

だいく

えてにくみては申さず。大慈大悲の力、無間地獄の大苦を

こんじよう

消

しょうあんだいしい

かれ

あく

今生にけさしめんとなり。章安大師云わく「彼がために悪

のぞ

すなわ

かれ

おや

とううんぬん

もう

こくしゆ

を除くは、即ちこれ彼が親なり」等云々。こう申すは、国主

ふぼ

いつさいしゆじよう

しししよう

ことごととお

そうら

とど

そうら

の父母、一切衆生の師匠なり。事々多く候えども、留め候

いぬ。

また麦むぎの白米はくまい一だ、駄ち

うづきじゆうににち

卯月十二日

はじかみ送り給たび候そうらい畢おわんぬ。

にちれん かおう

日蓮 花押

しじょうきんごどのごへんじ
四条金吾殿御返事